

「日本のな多神教文化を称賛するばかりでは私たちは前へ進めず、時代の変化にうそをつくことになる。一神教の価値観を知る必要がある」と、同志社大学一神教学際研究センター長の小原克博教授(46)は語る。日本では少数派の一神教を学ぶ意義について、特に東日本大震災後を生きる視点を込めて聞いた。【鶴谷真】

## 小原克博さんに聞く

——一神教を縁遠いと感じる日本人は多いと思います。

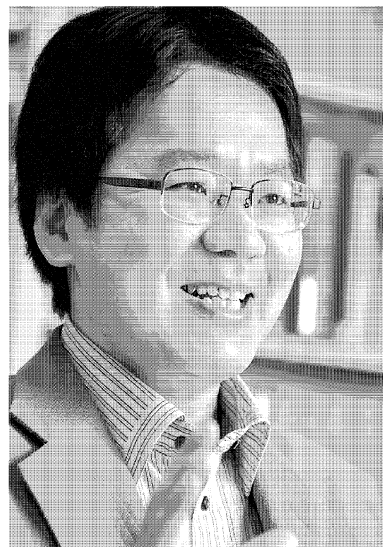
◆世界人口約70億人のうち、キリスト教徒20億人、イスラム教徒15億人とされます。人口だけでなく影響力も極めて大きい。好き嫌いの問題を超えて、日本が国際社会で生きていくためには一神教を知らねばなりません。お金を払ってオイルを買うというビジネスパートナーとしてだけでは信頼感醸成されません。

——東日本大震災による甚大な被害を前に、一神教的考えを批判し、自然を大切にする多神教の良さを見直す言説が目立ちます。

◆とても分かりやすいのですが、事実はその単純ではありません。日本宗教が自然保護に熱心だったのかどうかは検討の余地がありますし、キリスト教の中にも、自然との共生を強ううた流れがあるからです。明治維新後、まず日本の政治家や知識人が直面した一神教はキリスト教でした。欧米列強と対峙した時、その背景にあるキリスト教を当時の政治家や知識人は無視できませんでした。その際、実際にはキリスト教を否定して現れた啓蒙主義とキリスト教をこっちゃんにしてしまった。例えば、自然に対する人間の優位性を重視し、理性や合理性を重視するのはむしろ

## 一神教批判に異議

# 心のページ



—森園道子撮影

◇こはら・かつひろ 大阪府生まれ。同志社大大学院神学研究科博士課程修了。専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。著書に「宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅」など。

# 「線を引き強く」強さの

うることは1960年代から問われている。公書は典型です。究極が原発事故でしょう。日本人は、人間は自然の一部

「冒す」が普及しています。患者の意志を置き去りにして家族は医師任せにし、医療の基本は延命ですから、ほぼ自

争が目立つのは確かですが、気をつけたいのは必ずしも宗教が原因ではない。多くは別の政治的トラブルや権力争い

啓蒙主義です。それが近代的な人間中心主義、個人主義を生み出した。問うべきはキリスト教よりも、近代とは何であったのかです。

◆多くの近代的技術は、自然からエネルギーを人工的に抽出して人間のために使ってきました。それが書を及ぼし

動的に冒すに至る。命の運動性を重視する日本の生命観の影響もあるかもしれません。方、欧米では無理やり生かして安らかに死ねなくするのとは人間の尊厳に反すると考え、冒すのは非常に少ない。私たちは終末期医療における自己決定の大切さを学び、家族や周囲の人との対話を深める作法を確立すべきでしょう。

◆生きていけるのか考えるのが世俗化論者です。洋の東西を問わず、社会が近代化して科学が発展すれば宗教は不可逆的に社会の片隅に追いやられると長らく考えられてきました。ところが70年代後半以降、世界各地で宗教復興現象が見られます。79年のイラン

革命がそうです。81年の米レーガン大統領当選はキリスト教保守派が支えたものです。戦後の日本でも、60年代の高度経済成長期の都市部で、故郷を離れた人々を膨大に取り込んだ新宗教教団の発展は宗教復興現象と言っています。私たち自身の宗教性を知れば、世界を理解する第一歩になります。その上で、日本の伝統と一神教を対立的に考えるのではなく、むしろ両者を架橋する文明的な知恵が求められます。その知恵なしには、原発や先端医療といった近代技術への批判的問いかけも、適切にはなされないのです。